

和光よ、安らかに眠れ！

谷角 素彦

1997年5月13日、筆者の友人で、一時は当会会員でもあった北脇和光氏が肝炎で亡くなった。享年39歳の若さであった。早いもので、あれからもう1年以上が経ってしまった。同氏は晩年、中国にのめりこみ、新知見とともに数多くの昆虫類を日本に持ち帰り、研究者やコレクターにそれらをもたらし、その成果を目にしたり、彼に関するエピソードを聞くとき、果たしていた役割がいかに大きかったかを、今更ながらに思い知らされる。

北脇氏は、保育社時代の後輩であった。同じ虫屋ながら、筆者とはタイプが異なっていた。しかし、お互いに何となく認め合っているようなところがあった。彼のことは「月刊むし」317号の追悼文に書いたが、筆者が同誌の編集者という立場上、客観的記述に重きを置かざるを得ず、プライベートな部分にはあまり踏み込めなかった。そこで、本稿では個人的な彼との思い出、特に一緒に出かけた中国や韓国のことなどを、簡単ではあるが書きとどめておきたい。これは、ご遺族の真理子夫人の希望でもある。また、彼自身が文章で記録を残さない人間だったので、生前の足跡の一部を書き残す意味合いもある。

但馬むしの会では、北脇氏は文字どおり幽霊会員であった。おそらく、先輩の筆者を気遣って、数年間、会員になってくれたのだろう。そんな北脇氏であった

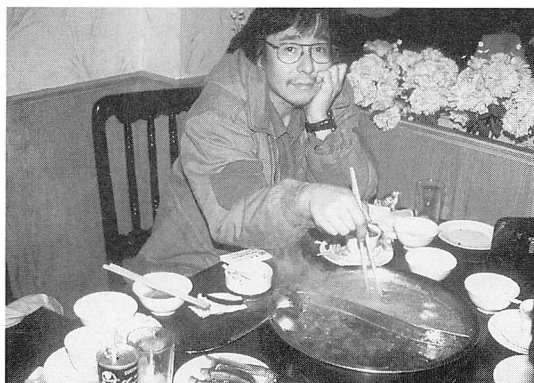
が、1984年8月23日に一度、扇ノ山に来たことがあった。このときは、脱サラした加野正氏を励ます会で、小ヅッコ小屋に仲間が集まっていた。北脇氏は夕方に登場して、みんなの食べ残しのインスタントラーメン（そのほとんどは汁であった）を餓鬼のようにかき込んだ。初対面の人も多かったが、彼はすぐにみんなと打ち解け、深夜まで薄明かりの下でトランプゲームに興じた。そして、早朝に愛車を飛ばして帰阪している。こんなところにも、彼の一面がよく表れている。

1985年4月27日には、沖縄本島の名護市で落ち合い、4日間ほど山原地方で一緒に採集している。当時は、ヤンバルテナガコガネが発見されて間もないころで、胸に熱いものを感じながらの採集だった。このとき、彼はルイスツノヒョウタンクワガタを採集しており、その標本は現在も筆者の手元にある。川の中を歩きながらトンボを採集していた姿も、臉に焼きついている。また、国道沿いのアイスクリーム売りの女子高生のところに、採集の行き帰りに立ち寄っていたのも、彼らしい姿であった。

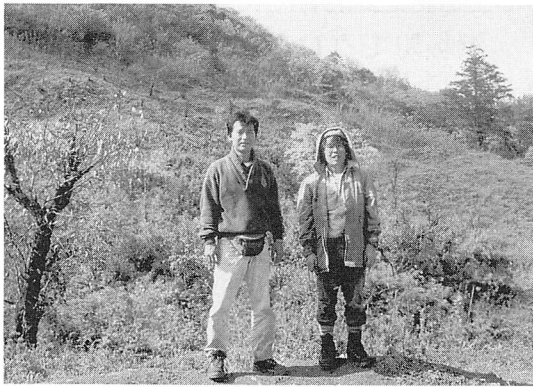
晩年は数度、一緒に採集や調査に出かけている。そのきっかけになったのが、1994年10月22～27日に実施した韓国旅行であった。まずは、南部の智異山に行き、チョウセンコリクワガタの探索をした。この山は、本種だけでなく多くの昆虫の基準産地になっている。



沖縄本島北部でトンボを採集中の北脇氏（1985年4月）



火鍋を食べる北脇氏（四川省成都市にて、1995年10月）



中国四川省美姑県での一場面
(左：田花氏、右：北脇氏、1996年10月)



大阪市立自然史博物館に所蔵される北脇コレクション

ここでは、彼は本種をほとんど採集できなかったが、コリリ材採集の面白さと難しさを知り、熱中することになってしまう。そして、次に訪れた加智山では10頭以上を採集して、やる気と採集センスの良さを見せた。下山後、とつぷりと日が暮れた田舎の駅で、旅情に浸りながら釜山行きの列車を待ったことも忘れられない。採集以外でも、怪し気なハングルを操りながら釜山の夜市をうろついたり、大好きだった焼き肉や辛い韓国料理を食べたことなど、数々の思い出がある。

中国では1995年10月18～31日、四川省西部で一緒にルリクワガタ類の調査を行った。充分な情報をもたず、行き当たりばったりで出かけた旅だったため、なかなか良好な環境にたどり着けず苦戦したが、最後に大当たりした。このとき得たルリクワガタは、分類的位置づけが難しいものであったがようやく解決がつき、新種として近々記載予定である。また、パンダで有名な臥龍を訪れたことや、夜中に雪の降る標高4000m以上の峠を、頭痛に悩まされながら越えたことなど、印象深い旅だった。

彼との最後の旅は、1996年10月18～26日、田花雅一氏も交えて、四川省南部の金陽県・美姑県・普格県に赴いたものだった。この旅で我々は、数々の成果を上げることができた。これにはもちろん、北脇氏の事前の踏査が大きな役割を果たした。それらは、ルリクワガタ属の3新種 (*Platycerus feminatus* アカアシツヤルリクワガタ, *Platycerus hiurai* ウラクロルリクワガタ, *Platycerus miyatakei* ミナミツヤルリクワガタ) として、田花氏と共著で発表した。旅先での北脇氏は、1年ごとに中国語会話が堪能になり、この年には現地人と何不自由なくやりとりを行っており、その上達ぶりに舌を巻いたものである。

今年の5月には、北脇氏が遺した四川・陝西省境の大巴山産ルリクワガタ属のうちから、1新種1新亜種を井村有希氏と共著で記載した。新種の種名に彼の名前をつけ、*Platycerus kitawakii* (オニルリクワガタ) としたのは、彼に対する感謝と哀悼の気持ちを表したかったからである。彼は生前、ことあるごとに「ゲニタリア (交尾器) の小さい種に、ワシの名前を付けんといて下さい」と言っていたが、残念ながらこの新種の交尾器はあまり大きくない。しかし、オスの大あごは長くて上反し、とてもカッコいい種である。形態を表すだけにとどまらず、オニ採り (たくさん採ること) が好きで、鬼門に入った同氏にぴったりの和名であると思っている。

そして、彼が遺した標本類と多くの中国関係の文献は、北脇コレクションとして、地元の大阪市立自然史博物館に末長く保管されることになった。

北脇氏に接していて感じたのは、キャラクターの面白さと人当たりの良さ、頭の回転の速さ、虫や自然に対する探求心の旺盛さなどで、一方ではいい加減な面も少なくはなかったが、それを許してしまえる不思議な人間的魅力があったことである。このことは、彼に接したことのある大多数の人が口をそろえて言う。ほんとうにユニークな人物だった。人間にいちばん大切な要素とは何なのだろうかと、ふと考えたりする。

北脇氏が目の前から姿を消して1年以上が経過したが、彼のニッチェを埋める人物 (彼に代わる存在) は見当たらない。今更ながらに、大した奴だったと思う。

「和光よ、いろいろと有難う。そして、安らかに！」